



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(10)

～第V章 克服期

～今、事故と向き合って～

中村周平

今回は、大学院進学後、修士論文のテーマに悩む院生生活について触れていきたいと思います。卒業研究、修士論文で「スポーツ事故」に焦点を当てようと試みたのですが、どうしてもテーマと

して選ぶことができませんでした。無意識のうちに、そのテーマを避けようとする自分がいました。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、「両親へのインタビュー」で交わされた会話の内容を

手がかりに、当時の私と両親の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュー)=I、父親=T、母親=Hとする。

1 修士論文におけるテーマ

大学院進学後、修士課程で研究しようと考えていたテーマは、学部の卒業研究でおこなっていた「障害学生支援」でした。私が学部時代にもっとも時間を費やした研究であり、日々支援を受けながら大学生活を送っていた当事者でもあったことから、私の中で数少ない研究を深めていけると考えていたものでした。しかし、卒業研究のテーマを考えた時、この「スポーツ事故」を取り上げたいという思いもありました。

S:「うーん、調停が終わったのが2008年の12月頃だったので、その頃にちょうど卒論書いてたんですよ。(中略)ただ、そのとき、二つ卒論のテーマで迷ってて…一つは『障害のある学生の支援』。自分が大学に入ってから、こういう支援があって、こういう風に支えられてるっていう。もう一つは、『スポーツにおける事故』のことを。実は中村先生(担当教員の方)に、進学のことでご相談したことがあって。その時に『スポーツの事故はどうなんや?』っていうアドバイスを頂いてたんですけど。(中略)中村先生のところをお伺いしたときに、その前に同志社のラグビー部で講演したことがあって」

I:「大学に?」

S:「はい。実は、同志社大学のラグビー部が2007年のお正月くらいに不祥事を起こして、警察沙汰になって。そのあと、再発防止委員会みたいなのが立ち上がったときに、調停でお世話になった弁護士の方がメンバーでおられて…。その方も高校でラグビーをされてた方だったんですよ。そのこともあって、再発防止の検討会の一環で『君の体験を話してくれへんか』ということでお話ただけて。それを話したのを、たまたま、ある新聞が取り上げてくれはって」

I:「そうなんや、へえー。」

S:「はい、関西地域限定やとは思うんですけど、ちょっと載してもらったのがいろんな人の目に入ったみたいで。先生が一回『これについていろいろ教えてくれへんか』みたいな話をしてくれてはったんで」

I:「先生もそれを見てはったわけや?」

S:「はい。テープとかで録音できてなかったの、一応、自分が憶えてる範囲の文字おこし…パワーポイントとレジュームと記憶をたどりながら文字おこしをして、先生にお送りしたこともあって、二つのテーマで卒論を迷ってました」

I:「なるほど」

S:「ただ、調停が終わってなかったことと、調停の内容が自分の思いとはかけ離れてたこともあって、踏み切れなかったですね」

I:「そっちを取らへんかったわけやな?大学における障害者の支援のことについて、のこを選んだわけや」

S:「そのほうが、この…」

I:「書きやすいわけや」

S:「書きやすいですよ、やっぱり」

私や家族の人生を大きく変えることとなった学校のグラウンドでの事故。私の人生にとっても大きな出来事でした。担当教員の方の助言もあり、どちらのテーマで卒業研究をおこなっていくか迷ってました。しかし、その当時は調停の最中であり、一向に終わりが見えないことに大きな不安を感じていました。卒業研究として深めるには抵抗があったのだと思います。調停が終わっても、かかった時間の長さ、失ったものの大きさから、これ以上「スポーツ事故」について触れたくない、これ以上周りの人からいろいろ思われるようなことはしたくないという思いがありました。

2 「スポーツ事故」を考えていく中で

大学院進学後、初めての個人発表を控え、担当教員の方にオフィスアワーをもつていただきました。その際、「スポーツ事故」についても話題にあがることができました。

S:「ホンマに夏ごろまでは他大学へヒアリングとかも行って、障害学生支援の現状を関西だけでも把握できたらなって思って、やってまわって。A3両面刷り2枚くらいにまとめて、それを持って中村先生のオフィスアワーに行ったんですよ。先生も障害学生支援の方にも興味を持ってくださったんですね。ただ、『君はもうひとつテーマ持っているのに』っていう話をしてくれはって、そのことについても少し触れてみたらっていうアドバイスをくれはったんで。最後に箇条書き程度にその事故のことを書いて、初めてのクラスターで発表したときに、自分が短い期間ではあるんですけど裏付けを持ってやってきたものよりも、最後に書いた3,4行に先生方も『すごく興味のある問題やね』っていうことを言うてくださって。そのときに、あらためてこのスポーツの事故っていうことがあまり知られてなくて、それを進めていくこと。ある意味ドロドロした部分と、もう一つはやりがいですよ。そういうことに初めて気づいた、こんなに重みのあるテーマなんかなくていう…自分で言うのもあれなんですけど。で、その後、どうするかを迷って…」

先生方から「スポーツ事故」について多くのコメントをいただくことになり、それがもつ社会的な意味の重さについて、あらためて感じることになりました。ただ、テーマとして扱うことを決心するまでには至らず、次の発表までに今後どのようにしていくか、私の中で模索することとなりました。

ちょうどその頃、宝ヶ池球技場でおこなわれる高校ラグビーの全国大会京都府予選の決勝を久しぶりに観に行くことになりました。調停を起してから3年間は、全く見に行く機会がなかった、というより観に行く気持ちになれませんでした。

S:「発表と発表の間に、たまたまうちの後輩ら成章高校と伏工の決勝戦観に行ったんですよ」

I:「ほー」

S:「ほんまに久々やったんですね。調停の最中はどうし

ても行けなくて」

I:「そりゃそうやわなあ」

S:「調停が終わって初めての11月に行って、そのときに空気が変わったんですよ。僕がスタンドに入った瞬間に、今までにぎわってたグラウンドが急に静かになったりとか、成章の応援団の前を通ったとき、みんな僕の話は知ってるんですけど、当然誰一人声は掛けてこないし、僕もホンマに知ってるっていう人だけパラパラと掛けてきてくれはる感じで。なんかその場の空気がすごく気持ち悪くて…」

I:「なるほど」

S:「すごい居づらい雰囲気やったんですよ」

I:「なるほど」

S:「そのときに、なんで後輩応援しに来ただけなのに、こんな思いせなアカンのかなとか、居づらい雰囲気はなんなんかなとかいうのが、すごいひかかって。それが自分自身、ずっとこのテーマで書けなかったこととか、調停では深めてきたけど自分の言葉を持って外へ発信していくことが、若干抑えていた分…いろんなことを考えることになって」

私が球技場に足を踏み入れた瞬間、何も悪いことはしていないのに、この場にいることが良くないことのように感じました。「自分は、ただラグビーが好きで試合を見に来ている。自分の母校が出ているならなおさら応援したい気持ちだけである。なぜラグビーで事故にあったというだけでこのような思いをしなければならないのか」。私の中で、今まであえて遠ざけてきた「スポーツ事故」のことをあらためて考えていました。このままではいけないのではないかと。

平成25年7月16日付の朝日新聞に、自身の事故について取材しいていただいた記事が掲載されました。

<http://www.asahi.com/shimen/articles/TKY201307150537.html>

記事に書かれていたことは、確かに10年前の自身の気持ちでした。原因がわからないことや、

徐々に感じていく周囲との温度差に憤りすら感じていました。

でも今回、自身は何より伝えなかったことは、そういった過去ではなく、「今」でした。

スポーツ事故をテーマに、修士論文を進めていく中で、何度も自分の過去を振り返りました。そして、「被害者」の立場でいることで、事故と正面から向き合うことを恐れている自分がいることに気が付きました。自身が事故の被害者として、学校や指導者に反省を求めてしまう姿勢でいたことや、相手の立場になって思いを巡らせられなかったこと。それが、原因究明をより困難にし、再発防止の妨げになる、一つの要因になっているのではないかという、客観的な視点に繋げることもできました。そして、事故から7年後、かつての指導者の方々にその想いを伝える機会を作ってください、お互いの当時の思いや葛藤を共有することができました。

自己満足かもしれません。でも、この数年の成章高校の先生方や、ラグビー部の指導陣の方々と関わりのなかで、長い歳月で開いてしまった大きな溝を少しずつ埋めてこれたのではと思っています。

自分の過去を振り返る機会をくださった大学院の先生方、事故ともう一度向き合いたい自身の思いに伝えてくださった成章高校の指導陣の方々、感謝の気持ちでいっぱいです。

今回、そんな今を、自身の事故を知っている、もしかしたら、自分の事故で心に大きな傷を負ってしまったかもしれない方々に伝えたいという気持ちで取材を受けました。そして、自分がラグビーを好きでいられた一番大きな存在である、中学高校時代の先輩方、同期、後輩にも、事故のあとに伝えられなかった、ラグビーをやってて本当によかったという気持ちを伝えなかった。

大変恐縮ですが、この場をお借りして、本当に伝えなかった想いを書かせていただきました。最後まで読んでいただきありがとうございます。